

教宣 せぶん

スーツを着た「地上げ屋」(2)

「経済合理性を最優先しなければならないと誰が決めたんだ？そんな法律でもできたのか？」「そっちこそ、俺がここで商売をする権利を奪おうとしているじゃないか」「うちにもごヒイキにしてくれるお得意様がいるんだ。その人の利便性はどうなるんだ」。おとなしいAさんが怒りました。勝手な理屈をこね、自分を悩ませてきた相手にAさんが切れました。そして「ビルの話は何も決まっていけないじゃないか。お前は俺をここから追い出したいだけじゃないか。ただの地上げ屋だ」とまくしたてました。青年はAさんの迫力にたじろぎました。金さえ積めば簡単にAさんがここから出て行くだらうと高をくくっていた青年は慌てふためきました。脂汗を流しながら「じょ、じょ、上司に相談します。出直してきます」と言って、逃げるように店から出ていきました。

後日、Aさんのところにビルの「中間答申」なる書類が送付されてきました。目を通すと、Aさんはビックリしました。実はAさんは、大正の時代からダンゴ屋さんを経営する3代目で、先々代からの伝統ある味を守り続けているAさんの店には下町のおばあちゃんを中心に多くの固定客がついているのですが、その答申では、新ビルの中の商売に「だんご屋」は採算が合わないとして、Aさんにはファーストフードの店を経営するようになっていました。そしてAさんのファーストフード店経営の研修スケジュールまで記されていました。怒りで手が震えたAさんは「中間答申」を叩きつけました。「長い間この地で商いをしてきた者のことをこの程度にしか考えていないのか」「暖簾の重さをこの程度にしか考えていないのか」「経済合理性のためには何をやってもいいのか」- Aさんは怒りとともに悲しみの感情さえ抱きました。しかし、この計画の全容や本質を把握したAさんは「こんなことがまかり通っては世の中がおかしくなる」と最後までたたかうことを心に誓いました。後日Aさんは「この計画の責任者に会いたい」と青年に電話をかけましたが、青年は「わかりました。伝えます」と答えただけで、「社長」というこの計画の責任者は、いまだAさんの下へ挨拶にも訪れていません。

いま、これと同じことが私たちの身の回りで起きていると思いませんか？